砂糖工場の廃墟 —アメリカ西部で繁栄したテンサイ糖産業の記憶—

矢ヶ崎 典隆

YAGASAKI Noritaka

I アメリカ合衆国のテンサイ糖産業

アメリカ西部をレンタカーで旅行していると、地方都市の市街地のはずれに高くそびえる古びた煙突を目にすることが時々ある。近づいてみると、それは工場の廃墟である。図1のように、立ち入り禁止になっていることもあるし、古い工場建物が倉庫として利用されていることもある。景観に着目する地理学者にとって、これは興味を大いにそそられる廃墟景観である。実は、このような工場の廃墟は、かつて繁栄した砂糖産業と製糖工場の名残なのである。

砂糖は私たちの生活に欠かすことのできない天然甘味料であり、甘さに対する欲求を満たすために、人間はさまざまな工夫を行ってきた。ココナッツ、メープル、モロコシなども砂糖の原料となるが、なんといっても重要なのはサトウキビとテンサイである。

サトウキビはニューギニア原産の作物で、熱帯・亜熱帯で広範囲に栽培される。サトウキビを原料とする製糖は、インド北部のガンジス川流域で紀元前500～350年頃に誕生したと考えられており、ここから世界

中にサトウキビと製糖技術が伝播した (Galloway 1989)。一方、テンサイは温帯の作物で、ヨーロッパでもともと飼料用に栽培されたものが改良され、19世紀に入って砂糖の原料として利用されるようになった。テンサイ糖産業はサトウキビ糖産業に比べると、はるかに最近の発展なのである。テンサイ糖産業はドイツを中心としたヨーロッパで19世紀後半に発展し、その結果、ヨーロッパは砂糖の輸入地域から輸出地域に変化した。世界の砂糖地図が大きく書きかえられたわけである (矢ヶ崎2017)。

アメリカ合衆国には、19世紀中頃までにヨーロッパからテンサイが導入されていたが、テンサイ糖産業が確立したのは19世紀末から20世紀初めにかけてのことであった。アメリカ南部のフロリダ半島からメキシコ沿岸地域には、サトウキビ栽培とサトウキビ糖生産地域が形成された。一方、アメリカ中北部から西部にかけてはテンサイ栽培とテンサイ糖生産地域が形成された。中でもコロラド州、ユタ州とアイダホ州、そしてカリフォルニア州には製糖工場が集積し、アメリカ合衆国のテンサイ糖産業の中核を担い、地域の経済発展に貢献した。高くそびえる煙突は、そうした製糖業を象徴するランドマークとなった。

じつはテンサイは、アメリカ合衆国の中部から北部にかけて、東海岸から西海岸まで、ほとんどどこでも栽培することができる。しかし、コーンベルトのような農業地域では、農民はテンサイ栽培に消極的であった。というのは、テンサイの栽培カレンダーがトウモロコシの栽培カレンダーと重なったためである。どちらも春に播種して秋に収穫する。豚や牛を飼育する混合農業地域では、テンサイも家畜用飼料とはなるが、トウモロコシはもっとも優れた飼料である。しかも、栽培に手間のかからないトウモロコシと比べて、テンサイ栽培には間引き、除草、収穫のために、身を屈め

図1 コロラド州ブライトンの砂糖工場廃墟
(2016年9月筆者撮影)

た手作業の重労働が必要である。少なくとも、種子の改良や機械化が進む以前はそうであった。そのため、テンサイは中西部の農民には受け入れられなかった。

一方、アメリカ西部の乾燥地域では、19世紀後半から各地で灌漑事業が進展して、農業が盛んになった。乾燥した環境の下でも、灌漑すればテンサイは栽培することができる。アメリカ西部の新しい灌漑農業地域ではテンサイは重要な換金作物となり、各地で農民や地元の実業家が製糖工場の誘致活動を行った。製糖工場の建設は、地域経済の発展に大きな効果をもたらすと期待されたためであった。

アメリカ西部の中でも製糖工場が集積したのが、コロラド州北東部のサウスプラット川流域と、コロラド州南東部のアーカンザス川流域であった。ロッキー山脈を水源としてグレートプレーンズを東に流れるこれらの河川の周辺では、19世紀末に水路建設によって灌漑事業が進展し、肥沃な農業地域が形成された。テンサイ栽培も盛んになり、20世紀に入ると各地に製糖工場が建設された。1930年の合衆国センサスによると、1920年代末の調査で、コロラド州のテンサイ栽培面積は全米の33%、テンサイ生産量は37%を占

めた。当時、コロラド州には17カ所のテンサイ糖工場があった。このうちの13工場が州北東部のサウスプラット川流域に立地した（図2）。

II グレートウエスタンシュガーカンパニー

コロラド州は、ほぼ中央部を境にして、東側はグレートプレーンズ、西側はロッキー山脈から構成される。中心都市は州都のデンバー Denverで、標高が1600 mほどであることから、「標高1マイルの町 Mile High City」と呼ばれる。デンバーは、ロッキー山脈の鉱業とグレートプレーンズの農業の形成に伴って発展した。市内からのロッキー山脈の眺望は素晴らしいし、最近では情報技術産業の集積も進んでいる。

デンバーからロッキー山脈の山麓に沿って北に70 kmあまり車を走らせると、ラブランド Loveland という人口7万人ほどの町がある。アメリカ合衆国では、どこの街に行っても博物館があって、その地域の地理と歴史を概観することができる。ラブランドにはラブランド博物館（入場料は無料）がある（図3）。建物の外壁を飾っているのは、図4のように、テンサ

図3 ラブランド博物館
(2016年9月筆者撮影)

図5 ラブランド博物館の砂糖関係展示
(2016年9月筆者撮影)

図4 ラブランド博物館の外壁の装飾
(2016年9月筆者撮影)

イをモチーフにした装飾である。そして館内の展示の中で特に目を引くのは、グレートウエスタンシュガーカンパニーに関する展示コーナーである。テンサイの栽培から砂糖の製造にいたるまで、さまざまな資料が展示され、また、砂糖産業の中核をなした製糖会社の概要が記録されている（図5）。

ラブランドに製糖工場が建設されたのは1901年のことであった。The Great Western Sugar Company of Lovelandがその正式名称で、コロラド州北東部では最初の製糖工場であった。その設立と経営に重要な役割を演じた1人の実業家が、ドイツ人移民のチャールズ・ブッチャー Charles Boettcherであった。彼は1852年にプロイセンで生まれ、17歳でコロラドに住む兄を訪れたことを契機として、アメリカ合衆国に移住した。金物店の経営、鉱山投資、銀行経営などに参加し

て成功し、財を成した。ブッチャーは、19世紀末の鉱山ブームの衰退を察知すると、テンサイ糖産業への投資を開始した。この試みの一つがラブランド製糖工場の事業であった。

コロラド州北東部におけるテンサイ糖産業の展開を考える時に、もう1人のドイツ系アメリカ人について言及することが必要となる。ドイツ系三世のヘンリー・ハブマイヤー Henry O. Havemeyerである。彼の祖父とその兄弟は、ドイツからロンドンを経由してニューヨークに渡り、砂糖精製工場に勤務したのちに、兄弟で砂糖精製会社を起業した。この事業は2人の息子たちへ、さらに孫たちへと継承された。3代目のヘンリー・ハブマイヤーは1891年にアメリカンシュガーリファイニングカンパニー American Sugar Refining Companyを設立し、アメリカの砂糖産業に支配的な影響力をもつようになったことで知られる。

ハブマイヤーはアメリカ西部のテンサイ糖事業にも投資した。コロラド州北東部では、既存の製糖工場を買収し、さらに工場を新設した。こうして、1905年に設立されたグレートウエスタンシュガーカンパニー The Great Western Sugar Company of New Jerseyは、コロラド州の、そしてアメリカ西部のテンサイ糖産業に大きな影響を及ぼした。前掲の図2に示したように、コロラド州北東部には合計13カ所の製糖工場が建設され、すべてがグレートウエスタンシュガーカンパニーによって経営された。アメリカ西部における製糖工場の一つの集積地が誕生したわけである。

III テンサイ糖産業の衰退と工場廃墟

アメリカ西部におけるテンサイ糖産業は、グローバル経済や連邦政府の経済政策の影響を受けて、大きく変化することになった。1934年の砂糖法 Sugar Act は、生産割当制、関税、価格保証金を組み合わせることにより、砂糖の壊滅的な低価格を抑えて、国内産業の維持に貢献した。しかし、連邦政府は1974年に砂糖法を更新しなかったため、砂糖をめぐる保護政策の時代は終わり、競争力の弱いテンサイ糖産業は崩壊への道を歩み始めた（矢ヶ崎2000）。

不況の時代をしばらく持ちこたえたグレートウェスタンシュガーカンパニーも、1985年には倒産した（Hamilton 2009）。こうしてラブランドの製糖工場も廃墟となった。図6のように、一部の施設は別の製糖

会社によって今でも利用されている。廃屋の屋根には、図7からわかるように、「それは砂糖だったIt was sugar」と書かれている。事実、長い間、砂糖は街の経済を支える存在であった。決してばかげたstupidな話ではなかった。

前掲の図2に示したように、13カ所の製糖工場のうち、6カ所が廃墟として残っている。州北東端部のオーヴィッドOvidもその一つであり、市街地の東側には、図8のように工場が閉鎖された時のまま放置されている。1926年に建設されたこの工場は、1985年まで操業した。煙突はなぜか取り壊されてしまったが、建物の側壁には会社名がそのまま刻まれている（図9）。

オーヴィッドからサウスプラット川に沿って80 km ほど上流に位置するスターリングSterlingの製糖工場

図6 ラブランドの砂糖工場
(2016年9月筆者撮影)

図8 オーヴィッドの砂糖工場廃墟
(2016年9月筆者撮影)

図7 ラブランドの砂糖工場の廃屋
(2016年9月筆者撮影)

図9 オーヴィッドの砂糖工場廃墟に残る社名
(2016年9月筆者撮影)

図10 スターリングの砂糖工場の今
(2016年9月筆者撮影)

図12 ロングモントの砂糖工場廃墟とロッキー山脈
(2017年3月筆者撮影)

図11 ウインザーの砂糖工場廃墟とその利用
(2017年3月筆者撮影)

図13 ロングモントの砂糖工場廃墟
(2017年3月筆者撮影)

は、1905年にスターリングシュガーカンパニーとして設立された。翌年にグレートウエスタンシュガーカンパニーによって買収され、1985年まで操業した。その施設は、図10のように、現在、ウエスタンシュガーコオペラティブWestern Sugar Cooperativeによって利用されている。これはテンサイ生産者の農業協同組合である。

ロッキー山麓に近いウインザー Windsorでは、1903年にウインザーシュガーカンパニーが設立されたが、2年後にはグレートウエスタンシュガーカンパニーによって買収された。ウインザー製糖工場は1967年まで操業した。閉鎖からすでに半世紀が過ぎたが、鉄道線路の南側に煙突がそびえ、隣接する煙突公園Chimney Parkから廃墟を望むことができる(図11)。なお、現在、工場建物は木材会社によって利用されている。

ラブランドとデンバーの中間に位置するロングモン

ト Longmontには、1903年にロングモントビートシュガーカンパニーが設立された。これは1977年に閉鎖された。市街地の南東部の斜面に、シュガーミルロード Sugar Mill Roadに沿って、廃墟となった工場がそのまま残っている(図12、図13)。

さて、冒頭で見たブライトン Brightonの製糖工場(図1)は、市街地の北部に1907年に建設されたもので、70年間にわたって製糖を続けた。図14は2017年3月に撮影したものである。半年前に撮影した図1と見比べると、明らかな変化を読み取ることができる。ランドマークだった煙突と工場建物がなくなっているのである。工場廃墟にも変化が生じていることがわかる。今後も、砂糖工場の廃墟を継続して観察していく必要がありそうである。

IV 存続するテンサイ糖産業

それでは、アメリカ西部のテンサイ糖産業は完全に消滅してしまったのだろうか。

フォートモーガン Fort Morganを訪れると、今でもテンサイ栽培が継続し、砂糖が生産されていることを理解することができる。フォートモーガンは、デンバーとオーヴィッドのほぼ中間に位置し、サウスプラット河岸に立地する。

テンサイを原料として製糖作業を行う製糖工場の操業はキャンペーンと呼ばれるが、2017年3月にフォートモーガンを訪れると、図15のようにキャンペーンの最中であった。前年の9月に訪れた時は、工場は静まり返っていた。しかし、キャンペーン期間には、テンサイを満載したトラックがひっきりなしに砂糖原料を

運び込んでいる（図16）。工場の敷地内にはテンサイが山のように積み上げられているのも印象的である。

もともこの工場は、1906年に市街地の北部に設立された。1985年にグレートウエスタンシュガーカンパニーが倒産した後は、前述のウエスタンシュガーコオペラティブによって買収され、現在でも操業を続けている（図17）。テンサイ栽培者が、自分たちのテンサイを加工するための製糖工場なのである。かつてグレートウエスタンシュガーカンパニーが所有した砂糖工場の中で、フォートモーガン工場が、コロラド州で稼働している唯一の工場である。

サトウキビ糖の製糖工場の場合、収穫したサトウキビはその日のうちに加工しないと糖度が極端に失われる。しかし、テンサイの場合、しばらく貯蔵すること

図14 ブライトンの砂糖工場廃墟
(2017年3月筆者撮影)

図16 フォートモーガンの砂糖工場へのテンサイの搬入
(2017年3月筆者撮影)

図15 フォートモーガンの砂糖工場（キャンペーン期間中）
(2017年3月筆者撮影)

図17 フォートモーガンのウエスタンシュガーコオペラティブ
(2017年3月筆者撮影)

図18 フォートモーガン博物館の砂糖関係展示
(2017年3月筆者撮影)

が可能である。かつてテンサイは鉄道で製糖工場まで運搬された。テンサイ栽培地域には必ずと言っていいほど、鉄道が敷設された。今日では、テンサイはトラックで広範囲のテンサイ栽培地域から搬入される。

なお、フォートモーガンにはフォートモーガン博物館・図書館がある。さすがに砂糖に関する展示は充実している(図18)。

コロラド州北東部のサウスプラット川流域には、テンサイ栽培と砂糖産業のためにさまざまな人々が流入した。ドイツ系の人々が製糖工場の設立と経営に重要な役割を演じたことは先に述べたが、実は、テンサイ栽培を担ったのもドイツ系の人々であった。ただし、彼らはドイツから移住したドイツ人ではなかった。

実は、18世紀にドイツからロシアのヴォルガ川流域や黒海北岸地域に多くのドイツ人が移住した。さまざまな優遇措置を享受して、ドイツ人は集落をつくり、ドイツ文化を維持した。それらはまさにドイツ系の文化島であった。ところが、彼らの子孫は、ロシアでドイツ系住民に対する迫害が強まると、19世紀末から20世紀初めにかけて、南北アメリカに移住した。

〈著者略歴〉

矢ヶ崎 典隆(やがさき のりたか)

1952年石川県生まれ。筑波大学講師、横浜国立大学助教授、東京学芸大学助教授・教授を経て、現在、日本大学文理学部教授。Ph.D.(地理学博士)、専門地域調査士。専門は、地理学、地誌学、アメリカ地域研究。主な著書に『食と農のアメリカ地誌』(2010年 東京学芸大学出版会)がある。

アメリカ合衆国のグレートプレーンズは、多くのロシア系ドイツ人を引き付けた。彼らはヴォルガドイツ人や黒海ドイツ人と呼ばれるが、サウスプラット川流域のテンサイ栽培において重要な役割を演じた(鈴木2016)。

このように、アメリカ西部のテンサイ糖産業を語るときに、製糖工場にテンサイを供給した人々のことも忘れるわけにはいかない(矢ヶ崎2014)。ロシア系ドイツ人に加えて、日本人も重要であったし、メキシコ人も農業労働者としてテンサイ栽培地域には欠かすことのできない存在であった。もちろん、砂糖工場の廃墟は、テンサイ栽培に従事した人々について直接的には語ってこないけれども。

アメリカ西部を自動車で旅行するとき、町はずれにある古い煙突に注目してはいかがだろうか。少なくとも私は、今後も砂糖工場の廃墟探しを続けるつもりである。古い煙突を目印にして。

文 献

- 鈴木健夫 2016. アメリカ合衆国に移住したヴォルガドイツ人——コロラド州サウスプラット川流域の甜菜栽培. プロジェクト研究12: 53-69.
- 矢ヶ崎典隆 2000. アメリカ合衆国アーカンザス川流域の甜菜糖産業. 歴史地理学42(4): 1-22.
- 矢ヶ崎典隆 2014. アメリカ合衆国カンザス州南西部の甜菜糖産業とロシア系ドイツ人. 歴史地理学56(2): 1-24.
- 矢ヶ崎典隆 2017. 砂糖の地理学. 日本大学文理学部編『知のスクランブル——文理的思考の挑戦』179-191. 筑摩書房.
- Galloway, J. H. 1989. *The sugar cane industry: An historical geography from its origins to 1914*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hamilton, C. 2009. *Footprints in the sugar: A history of the great western sugar company*. Ontario: Hamilton Bates Publishers.